

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所

〒259-1293 平塚市土屋 2946

神奈川大学湘南ひらつかキャンパス

TEL 0463-59-4111 (内線 2200)

「富士に想う」

林 悦子

あまそりたつ ふじのねの
たかきすがたを あおぎつつ
たかきをおもう ころもて
おしえのやまを のぼりゆく
われらのたもとに かぜふきみちて
よよめぐみの つゆこそかかれ

なにやら判じ物のようなこの文句は、85周年を迎える小学校の校歌である。「天そり立つ富士の嶺の、高き姿を仰ぎつつ、高きを想う心もて教えの山を登りゆく…」。最後は、「代々の恵みの露こそかかれ。なんと係り結び。当時は全く意味不明のまま、「あーま、そっそお、りったつつう」と歌ったものだ。最近になって小学校のHPを開いて感激したのは、同じ校歌をいまの子供たちも歌い続けているということ。しかし、時代は移り、都会の小学校はいずれも少子化で、統合案が進行中であるらしい。

中学は中野富士見、そして都立富士高校と富士山づくしの学校生活。その後、フラフラと国内外の大学・大学院を遍歴し、まずは北海道・札幌に赴任。冬になるとスケートリンクさながらに凍る路面をツルツルと、辿り着いたのが、ここ湘南は平塚の地。冬の富士の眺めは何物にも代えがたく、住まいまで「うわー、富士山が見える！」という一点で秦野に決定。夏暑く冬は底冷えのする盆地特有の悪条件も何のその。「早起きは三文の得」と、富士山を見ながら朝食を摂ることができるという、観光地のホテルならイチオシの好条件

を唯一のインセンティブに、寒い朝、1限の授業を乗り切る！

秦野から望む富士は、堂々として、ちょっと太め。左頬に宝永山噴火痕が焼くのも、アバタもエクボのご愛敬。綺麗に裾を引いて、夜明けの薄紫から紅が差し、白く雪をいただくアノおなじみの富士山に変貌していくさまは、関東ならではの冬晴れの朝のお楽しみ。

なぜこれほどまでに富士が好きかと問われれば、それは裾野が広いから。日本美術史から始めて、本格的に経営学を志すまで回り道の学問街道であったけれど、いまになって、やってきたことすべてが無駄ではなかったと思えるようになってきた。

周知のように、経営学は学際的な学問の典型 — 法学、経済学、統計学は言うに及ばず、心理学、社会学から文化人類学にいたるまで、まことに裾野の広い学問である。日々教室で、できるだけ面白味のある授業、学生の興味を喚起できるような事例を示すには、多くの「引き出し」が必要だ。

例えて言えば、風景の一変した東京ミッドタウンのビルのように高くても、ただまっすぐ上へ伸びているだけでは面白味は無い。もちろん、“Jack of all trades”で、何もかも中途半端の「なんでも屋」は困るけれど、いろいろな引き出しがあるに超したことはない。これらがいつか本物の教養に結びついて、富士山のようにきれいな円錐形を描くまでには、まだまだ「教えの山」を登りゆかねばならないだろう。

新年を迎え、冬将軍も威風堂々の本番である。北風びいふう吹き抜くけれど、しんしんとどころではなく「雪というものは、横から降る」土地を体験した者には、抜けるような青空の冬はありがたい。さあ今日も、富士山見ながら頑張るぞ。

(所員/はやし・えつこ)

第3回インゼミ大会

経営学部主催、国際経営研究所、国際経営学会後援の第3回インゼミ大会が11月21日、経営・会計部門28チーム、国際部門18チーム、新規事業部門7チーム、計53チームの参加で開催されました。インゼミ大会も3回目を迎え、経営学部の重要な年間イベントとして定着してきました。

学生たちの熱意あふれる発表に対して、最優秀賞(4チーム)、優秀賞(4チーム)、奨励賞(7チーム)が選ばれました。経営・会計部門からは、「顧客満足度向上改善の提言」

(穂積ゼミ)と「ヘッジファンドは日本の金融資本主義の一端を担えるか」(田中ゼミ)が最優秀賞を受賞。国際部門からは「小学校英語教育の必要性」(ロゴスキーゼミ)、新規事業部門からは「広告」(青木ゼミ)が最優秀賞に選ばれました。

優秀賞には「デジタル音楽配信の現状と課題」(奥邨ゼミ)、「ソニーの携帯音楽プレーヤーにおけるシェア拡大」(浅海ゼミ)、「発見!! 真実の派遣」(浅海ゼミ)、「コーディネートサービス」(青木ゼミ)の4チーム、奨励賞には「電気で変わる環境と人」(穂積ゼミ)、「ホームセンターの生き残りをかけて」(アサモアゼミ)、「ITによる教育サポート」(アサモアゼミ)、「地域密着型SC」(アサモアゼミ)、「2016年東京オリンピックによる影響」(田中ゼミ)、「アメリカ文化における芸術的側面: ティファニーとヒスパニックアート」(金谷ゼミ)、「新しい広告媒体」(青木ゼミ)の7チームが選ばれました。

受賞した各チームからは、インゼミ発表にそなえ多大な準備時間を費やした努力の跡がみられます。おそらく学生の資質向上におい

て、授業で学ぶこと以上の学習効果がインゼミ大会から得られたと思われます。2008年度の第4回大会も、昨年以上の成果を目指し、ゼミ生の積極的な参加のよびかけをお願いいたします。

経営革新フォーラム：経営の社会性

サロン・デ・ワイン主催、平塚市後援、平塚商工会議所中小企業相談所共催、神奈川大学国際経営研究所協催のシンポジウムが11月10日、200名近い参加者のもと、平塚市勤労会館にて開催されました。

基調講演は麗澤大学国際経済学部、大橋照枝教授の「日本のサステナビリティは、万全か：ヨーロッパ環境都市のヒューマンウェアに学ぶ」でした。パネリストとして、(株)ブレスト代表取締役：伊藤昭典氏、平塚市長：大藏律子氏、神奈川大学経営学部長：照屋行雄教授、神奈川県湘南地域県政総合センター商工労働部長：西川たまえ氏、(株)湘南ベルマーレ代表取締役：真壁潔氏の5名。総合司会は本学部の海老澤栄一教授が務めました。

基調講演とパネルディスカッションを含め3時間半にわたり活発な意見交換がおこなわれました。海老澤ゼミの多くの学生が受付と案内を務め、学生にとっても有意義な経験になりました。

このような地域の役所、地元企業をまきこんだ活動が、地元密着大学として神奈川大学経営学部の存在意義を高めていくのではないのでしょうか。

カラオケからデジタル・ネットワークへ

奥 邨 弘 司

「カラオケ法理」という言葉をご存じでしょうか。法学研究者や法曹関係者であっても、知的財産権の専門家を除けば馴染みが薄い用語だと思います。そもそも、世界を異にする、「カラオケ」という言葉と「法理」という言葉が一体となっているのは、奇異な感じがします。しかし、私が専門とする著作権法の世界で、今最も熱い議論が交わされている分野の一つが、このカラオケ法理関連なのです。

カラオケ法理とは、著作権を直接(≡物理的に)侵害していない者が、著作権侵害に対して一定の管理・支配を有し、そこから利益を得ている場合に、その者を著作権侵害者と捉えて責任を問う法理論の通称です。

この考え方は、カラオケスナック店が流行し始めた頃に、客の歌唱に関して、店が著作権料を支払うことを命ずる判決ではじめて採用

されたため、カラオケ法理と呼ばれるようになりました。(その判決では、客は店の管理下で歌唱し、店は客の歌唱から受益しているとして、店が侵害者と判断されました。)

ところでカラオケ法理は、今やカラオケとは無関係な場面でも適用されるようになっています。P2Pファイル交換システムを利用した違法なファイル交換に関してシステム提供者の責任が問題となった事例や、テレビ番組の録画サーバビジネスの合法性が問題となった事例が有名です。このような適用場面の変化は、著作権法理の特徴を如実に物語っています。

カラオケ法理が登場した約20年前、当時の技術が生み出したエンタテインメントの最先端はカラオケでした。今それは、デジタル・ネットワーク技術関連に移っています。著作権法という、小説や音楽、絵画などのような芸術作品

を保護する法律のように思われますが、実はこのように、時々の技術が生み出すエンタテインメントの最先端で生じる問題に向き合っているのです。もっともそれは、グーテンベルクが活版印刷技術を発明し書籍の流通が拡大する中で、海賊版が横行するようになったときに、その対策として生み出された著作権法制にとって、誕生の瞬間から、宿命付けられていたことなのかもしれません。

デジタル・ネットワーク技術の進歩・普及は、今、著作権法制に光と影を投げかけています。デジタル・ネットワーク技術によって、利用者は著作物の新しい利用方法を手にすることがで

きましたが、その一方でデジタルコピーの拡散が権利者を悩ませています。そしてこのような状況は、著作権法制を巡って、権利者と利用者が対立する

構図につながっています。すなわち著作権を強化したい権利者と自由な利用を拡大したい利用者の対立です。

しかし、著作権法制が保護の対象とする小説、音楽、絵画、映画、ゲームなどのコンテンツはいずれも、人間がその思想感情を表現したものに他なりません。表現行為は、表現者だけで完結するものではなく、本来その受け手がいてこそ意味のあるものです。とするなら、著作権法制を考える上で、権利者と利用者は対立する存在ではなくて、むしろ車の両輪として位置づけられるべきだと思うのです。

「デジタル・ネットワーク技術と著作権法制の幸せな未来のために」ちょっと大それているのですが、私の研究の基本テーマです。

(所員/おくむら・こうじ)

研究余滴

国際経営研究所フォーラム講演会

徳島県上勝町、笠松町長を迎えての国際経営研究所フォーラム講演会「究極のごみゼロ社会を目指して：葉っぱビジネスから地球環境への挑戦」が11月29日、午後6時30分から平塚商工会議所との共催で平塚市中央公民館にて開催されました。

神大中島学長、照屋経営学部長をはじめ、約300名の来聴者で、横浜市を含む近隣10自治体の職員、議員の方々のご参加をいただきました。基調講演、パネル討論の約3時間、退席される方もほとんどなく、最後まで熱心に耳を傾けていただくことができました。

参加者全員に講演会へのアンケートを配布しましたが、そのうち100名からの回答をいただきました。笠松町長の地球の将来を展望したビジョンと実行力、ゼロ・ウェイスト事務局長としてごみゼロを推進する、弱冠26歳の松岡夏子氏の活躍ぶりに賞賛の声がよせられました。またパネル討論で紹介された株式会社リコーのごみゼロへの取り組みへも高い関心呼びました。

講演会の総司会をしてくださった浅海先生、リラックス体操を指導してくださった嶋谷先生にも賞賛の声が寄せられていました。また、会場にて受付や案内役を務めた松岡ゼミの学生たちについても、明るく親切な対応に好感が持ったという声が多数寄せられました。

上勝町ごみゼロ推進基金への協賛金は14万円に達しました。笠松町長の基調講演は1月7日にケーブルテレビ局の「TVフォーラムかながわ」で放映されました。

この講演会は実に多くの方々のご協力で開催にこぎつけることができました。特に講演会の実行委員長、松岡先生の獅子奮迅のご活躍に心よりの感謝と、ねぎらいの言葉を送り

たいと思います。また国際経営研究所事務局の川崎さんにも雑多な講演会準備雑務へのご協力、感謝いたします。

神奈川大学メディア教材製作プロジェクト

12月12日午後3時より、神奈川大学メディア教材製作プロジェクトの作品上映会が67号館306教室にて開催されました。このプロジェクトは、『2007年「日中文化・スポーツ交流年」認定事業：日中国交正常化35周年記念』として認定されています。

開催目的は、1)映像を通して幅広いジャンルの来場者との交流により、さらなる中国の理解を深めること、2)“都市”と“農村”というテーマを中心に、テレビで観る映像とは違った学生の視点からみた“中国像”を理解してもらうこと、の2点です。

湘南ひらつかキャンパスチームからは、「DREAM」、「水に見る中国」「農村における観光」の3作品、外国語学部中国語学科からは『中国・世界の100円ショップの生産拠点・「義烏」に行く』の1作品が上映されました。

これらの作品は、企画、撮影、編集のすべてが学生の手によっておこなわれ、学生の視点から観た現代の中国像を映像にしてあります。それぞれ力作ぞろいで、学生にとってすばらしい学習経験になっています。特に『中国・世界の100円ショップの生産拠点・「義烏」に行く』と「DREAM」の2作品は参加者から高く評価されました。

毎年12月に映像発表を続けてきた、メディア教材製作プロジェクトも5年目となり、次のステップとして、一般市民に向けて発信する“市民参加型”の映像祭として発展させる計画が進行中です。映像を通して一般の方々等に等身大の“現代中国像”を理解していただくことを目的としています。